～松蔭赤倉寮～

田尻幸子さん
高校 11回生

父が平成3年に75歳で亡くなり、母が平成5年に71歳で亡くなってしまった。母は38歳、私が18歳の時に関節リウマチにおかされ、後半生は年中痛い痛いと言い続けていた。私は長女で、下に弟二人がいた為、自然と母親代わりをしなければならなかった。

ある時、下の弟夫婦が遊びにやって来た所、千と勢会から「ちとせのたより」が送られて来たのを読んだ二人は、「赤倉に寮があるのであれば一度行きたい」と言い出して、お葬式も済んだのだし、温泉に入りたいと言う事になった。

「姉ちゃん連れて行ってあげるから、車の中に座っていればいいから。」と言って、弟夫婦は、かいがいしく、私の世話をしてくれるのであった

赤倉に着くと、大雪で、管理人さんが開けておいてくれた寮に入った。中には300人が、宿泊できる設備があった。そこに3人だけ泊まるのである。広すぎて、弟の嫁はトイレへ行くのが怖いから、ついて来てと言っていた。湯舟は大きくて、湯の花が白く漂っていた。お風呂を上がり、弟夫婦の用意してくれた夕食を食べて、寝る事になった。でもだんだん広すぎて、幽霊が出そうで恐くなり、明くる日早朝、帰る事にせざるを得なかった。